

令和4年5月27日 市長定例記者会見 会見録

◆司会

それではただ今から、市長定例記者会見を始めさせていただきます。市長、よろしくお願いたします。

◆市長

よろしくお願いたします。今日6時前に静岡市南部、北部、大雨警報を発令いたしました。おかげさまで今のところは、市内、大きな被害はないようであります。これから出水シーズンが始まりますので、危機管理しっかりした上で、報道機関の皆さんに迅速に正確な情報をお伝えしたいと思いますので、ぜひ市民の安心安全を守るためにお力添えをよろしくお願いたします。

それでは今日の発表項目は2つでありますね。まず、最初に、静岡市歴史博物館公式ロゴマークの決定についてであります。さっそく公式ロゴマークが完成いたしましたので、この場で披露したいと思っております。こちらでございます。

この位置でいいかな。どうしよう。この位置でいい？

少し準備をさせていただきます。

◆司会

今、資料のほうをお配りしておりますので、少しお待ちください。

では市長、よろしくお願いたします。

◆市長

素晴らしい、奥深い公式のロゴマークを発案していただいたと感謝をしております。このロゴマークは博物館の役割や目的を示し、博物館の価値と魅力を広く発信するものになるよう、デザイン業務に精通した複数のプロフェッショナルの皆さんから企画の提案を受け、静岡市歴史博物館の初代館長に就任予定の中村羊一郎先生を委員長とする審査会で決定したものであります。では私から、このロゴマークで表したかったもの、そのコンセプトについて簡単に画面をご覧いただきながら説明をいたします。

まずスライド1ですが、このロゴマークは歴史博物館の展示の重要なテーマであり、静岡市の歴史を語る上で欠かせない人物、徳川家康公の花押をデフォルメし、単純な直線と曲線で表現をしています。この静岡市歴史博物館の三つの役割、もうご承知のことと存じますけれども、「歴史探究」「地域学習」、そして「観光交流」であります。この三つの役割を、○で合わせてデザイン化してあります。さらにこの三つの○を重ねたことによって現れた曲線を使って、静岡市の頭文

字であるS、アルファベットのSを表現しています。そして、このコンセプトカラーは青であり、富士山とか自然豊かな静岡市の海や空をイメージしているということでもあります。最後に、最新のこの施設の建設の状況の外観を、ドローンを使って皆さんにお知らせしたいと思います。

ただ今ご覧いただいているこの映像は、市の職員がドローンを活用して撮影したものです。災害のときにはドローンを使った情報収集が効果的であるという考え方から、静岡市でも、いざというときに備えてドローンを操縦する職員を育成をしています。通常ときには、このような形で静岡市の風景などを撮影することによって腕を磨いてもらうし、いろんなシティープロモーションに活用できる、そんな取り組みを進めているところであります。映像にありますように、プレオープンは7月23日の土曜日と決まりました。この時には、1階の戦国時代末期の道と石垣の遺構を、皆さんにご覧いただきたいと思っています。また式典の開催も予定しておりますので、詳細につきましては、改めてお知らせいたします。1項目目は以上であります。

続いて2つ目は、公民連携による脱炭素先行地域の整備推進についてであります。この会見の後、12時から第一弾の協定締結式が控えておりますので、先だって私からそのバックグラウンドについて発表をさせていただきます。これもご存じのとおり、私どもは国より「脱炭素先行地域」に指定されて、これから取り組みを強めていくわけでありませうけれども、そのエリアは海沿いの清水区、「JR清水駅東口地区」、清水区「日の出地区」、そして駿河区「恩田原・片山地区」であります。ここに太陽光の発電の設備とか蓄電池など、再生エネルギーの電源を効率的に利用するための設備の導入などを推し進めて、脱炭素先行地域の実現を図っていきます。国の定める2013年度比の温室効果ガスは、2030年、46%減ということではありますが、今年度中に、その国の目標よりも高い50%以上を目指して、この取り組みを進めていこうというふうに考えております。その第一歩としての公民連携で、今日は鈴与商事株式会社様と協定を締結します。そして、来月中旬からは、三つのエリアへ太陽光発電の余剰電力を供給していただける事業者の募集を開始するとともに、7月下旬には三つのエリアでの取り組みに参画いただける事業者様と静岡市で、公民連携の協議体である「脱炭素先行地域推進コンソーシアム」を立ち上げる計画です。さらに今年度は脱炭素先行地域の取り組みも含めた、静岡市全体の地球温暖化対策を進めるための「第3次静岡市地球温暖化対策実行計画」の策定年度となっており、この計画策定に当たっても、国の補助金の採択を受けております。25日に政令指定都市の市長会議が、久しぶりに顔を合わせて実開催されたわけですが、今年度、私は「エネルギー環境SDGs部会」に所属をして、座長が札幌市長で、このことについて議論をしました。それぞれの政令市が非常に意欲的に

それぞれの取り組みを発表し合いましたけど、私も大変刺激を受けました。そして、それぞれ、政令市が国よりも高い目標を持って全国の自治体をけん引していこう、リードしていこうと、それでも世界水準に比べればまだまだなのでありますけれども、そんなお互いの温度を高め合うような白熱した会議になりました。静岡市も頑張っていかなきゃいけないなという気持ちを新たにしました。とにかくSDGsの17番目の目標、「パートナーシップで目標実現をしよう」ということで、政令市間、自治体間の共同作業も必要ですし、あるいは民間企業の皆さんとの連携も不可欠だというふうに思っております。2つ目の発表は以上です。よろしくお願いします。

◆司会

それではただ今の発表項目につきまして、皆様からのご質問をお受けしたいと思えます。いかがでしょうか。NHKさん、お願いいたします。

◆NHK

NHKです。脱炭素について、ソーラーパネルは倉庫の屋根とか、要は山間部でのソーラーパネルの設置は、山肌への設置はしないという方針だという理解でいいですか。

◆市長

まずは、この海沿いの脱炭素先行地域で取り組みを進めるというのが今日の発表でありますので、ご理解いただきたいと思えます。

◆NHK

ですから、静岡市内でも清沢のケースが問題になりましたけれども、函南とか伊東で問題になっているような山間部で土砂崩れですとか、環境破壊につながるようなソーラーパネルはやらないというのが、静岡市の方針だということでもいいですか。

◆市長

いやいや、これは両立を図らなきゃいけないと思えますね。この再生自然エネルギーを導入するという方向と、地域の安心安全を守るということの両立が必要であります。そこの辺りはケース・バイ・ケースで、これから考えていくというご理解でお願いいたします。

◆NHK

建物の屋根とか地面の設置じゃない、山肌への設置も否定はしていないということですかね。

◆市長

おっしゃるとおりです。

◆NHK

分かりました。あと脱炭素は結構なのですけれども、環境局に聞く限り、太陽光パネルを生産したり廃棄したりすることに伴うコストですとか、それに伴うCO<sub>2</sub>排出は考慮されていないようなのですけれども、この辺り、市長はどのようなビジョンを持ってやられているのでしょうか。

◆市長

どのようなビジョンということは、先ほど申し上げましたとおり、やはり国の大きな方向性として、2030年までに我々の掲げた目標をクリアする。これは太陽光パネルだけではないし、様々な方法があろうかと思えます。そのミックスによって、我々の目標を達成する、これがビジョンであります。先ほど申し上げた通り今年計画を作っておりますので、50%以上の2013年度比削減目標を掲げて取り組んでまいりたいというふうに思っています。

◆NHK

その時に発電に伴うCO<sub>2</sub>排出削減は分かるのですけれども、太陽光パネルの生産や廃棄に伴うCO<sub>2</sub>排出は、それはもう考慮しない、出ても仕方がないという考え方になっているのでしょうか。

◆市長

もう一度、環境局長、ちょっとお願いします。もう一度質問をお願いします。

◆NHK

環境局に、私、聞いている限り、発電時の脱炭素を目指しているのがあって、ソーラーパネル生産や廃棄に伴うCO<sub>2</sub>排出は特に計算外としている、という理解をしているのですけれど、これはそういうふうやっていくというのが静岡市の方針なのか。

◆環境局

環境局長、田嶋です。よろしくお願ひいたします。今、NHKの方がおっしゃられたように、太陽光を設置するに当たってのCO<sub>2</sub>、それから廃棄するときのCO<sub>2</sub>、もちろん当然あります。それは考慮しますが、計画を作る段階では、まずはCO<sub>2</sub>の削減にどれだけ太陽光が寄与するか、そういうことをしっかり位置付けて、その何年後かに廃棄するときとか作ったときの分は、大きな計画の中、ビジョンの中でもう少し意識をしながら、それは考えていきたいと考えております。

◆NHK

現状の温室効果ガス削減の数値目標の中では、生産、廃棄に伴う排出は計算には入れていないということですね、現状では。

◆環境局

そうです。入れてはいません。

◆NHK

分かりました。ありがとうございます。

◆司会

その他、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。それでは幹事社質問に移りたいと思います。読売新聞さん、よろしくお願ひいたします。

◆読売新聞

幹事社の読売新聞です。よろしくお願ひします。2問あります。一つ目は姉妹都市の話です。前回の会見で、市長は海外姉妹都市たるカンヌとの交流、カンヌウィークについて説明されましたが、一方、国内の姉妹・友好都市との交流についての発信は、確かに少ないように感じます。先日の政策提言の際に指摘されたことですが、いずれも室蘭市、上越市、佐久市というのは旧清水市時代に提携されたので、合併後はおざなりになっているのではないかと、というふうな見方があるようです。今後、こういった国内の都市とも交流を再び深めていくおつもりはないのでしょうか。改めてお伺ひします。

◆市長

あります。

◆読売新聞  
あります？

◆市長

はい。コロナ禍があったものですから、少し見えづらくなっているというか、制約されている部分は否めないと思いますが、こつこつと継続をしているつもりです。おざなりになっているという印象があるのならば、我々の情報発信が少なかったなというふうに反省しなければいけないなというふうに思っています。ですので、このような会見で取り上げていただいたというのは大変ありがたいなと思います。少し、それぞれの自治体との状況について説明させていただきますと、スポーツを中心とした旧清水市から発想されていまして、サッカー交流が伝統的に交流の中心であります。まず室蘭市については、毎年12月に開催される静岡市長杯、清水チャンピオンズカップ、アンダー12のサッカー大会に、室蘭市内のチームが参加してくださっています。一方、室蘭市は、今年市制の100周年、また港繋がりですから開港の150周年、我々、清水港よりも歴史が古い港なんですね。その周年事業を抱えて、7月末には記念式典が行われます。そこで私も、その式典に参加をする予定であります。同時にその時、物産展を開くということでもありますので、静岡市の物産も室蘭に持って行って、そして室蘭の市民の皆さんに紹介していきたいというふうに思っています。また新潟県の上越市、長野県の佐久市についても、スポーツの交流をしておりますし、相互に物産展をやるということだったら呼び掛け合って交流をしておりますし、また広報紙へのプロモーション記事の掲載なども続けております。またこの上越と佐久については、災害時の応援の協定も締結をしておりますので、例えば令和元年の時、佐久市がかなり厳しい災害に見舞われましたが、市の職員を佐久市に派遣し、復旧のお手伝いをさせていただきました。こんな形でコロナ禍、中にあっても交流は続けています。ただし、そのようなご指摘があったということは、これをさらに拡充していくということについて、3人の市長とも今後、議論を深めてまいりたいというふうに思っています。

◆読売新聞

続いて2問目です。建穂の自治会長さんが先日、ウクライナからの避難家族への経済的支援を求める要望書を市と市議会に提出されました。浜松市など、自治体の一部には実際に生活費の一部など、金銭的な支援を実施しているところもあります。静岡市では今のところ、市営住宅提供以外の目立った支援というのは見えてきていませんが、今後同様な支援をする予定はないのでしょうか。住宅提供以外の支援で、近く実施する予定のものはございますでしょうか。教えてください。

さい。

◆市長

その支援の枠組みについては現在検討中ですが、金銭的な支援を含めて検討をしております。

◆読売新聞

検討をしているというのは、金銭的な支援も含めて実施する方向で検討するという、しているということですか。

◆市長

おっしゃるとおりです。

◆読売新聞

これはいつ頃、時期的な目処みたいなのは考えていらっしゃるのでしょうか。

◆市長

これから、なるべくスピード感を持って対応していきたいと思っています。

◆読売新聞

分かりました。すいません。ついでに聞きます。今、2世帯いらっしゃいますけれども、その後、何かまた別の家族が来たいとかいう話は市のほうには寄せられてはいないのでしょうか。

◆市長

あります。

◆読売新聞

あります？

◆市長

はい。まだまだこれからでありますけれども、意向は聞いております。

◆読売新聞

そういう話も来ているということ？

◆市長

はい。

◆読売新聞

ありがとうございました。

◆司会

それでは、ただ今の幹事社質問に関連をしたご質問をお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。NHKさん、お願いいたします。

◆NHK

NHKです。経済的支援とおっしゃいましたけれども、これは一般財源を使われるのか、それともふるさと納税とか寄附金を使われるのか、こういった枠組みを考えていらっしゃいますか。

◆市長

これも含めて検討中であります。

◆NHK

公費を使うことも視野には入っているという？

◆市長

はい。

◆NHK

それは避難していらっしゃる期間、どれぐらいに及ぶか分かりませんが、定期的に経済的に支えるというものなののでしょうか。

◆市長

共通認識だと思いますけれど、本当にウクライナの国民の皆さん、今、非常事態ですのでね、それをきちっと支援をしてあげることが、市民感情だろうと思います。でも、一方、公的な一般財源からということだと、一方で他の国籍の外国の方から、ウクライナばかり、私たちだって生活は苦しいんだ、私にも金銭的な支援を欲しいというような要望の声も入っているということも報告をもらっています。その辺りをどういうふうにして、行政として整理をして支援を行っていくのかということについて、ぜひご理解をいただきたいと思います。



◆NHK

ではどちらかというと、ふるさと納税とか寄附金とか、別の財源を探すのが主かという…

◆市長

それ、どう思われますか。またご意見も寄せてください。もし国際交流課長から追加の答弁があったら、いいかな。

◆NHK

もう少し伺います。私が聞き及んでいる限り静岡市の特徴として、特に小中学生、お子さんが避難してきていると。日本語が全くといっていいほどできないので、学校に通うことは、それは受け入れられるのでしょうかけれども、授業で何かを学ぶですとか、友達と意思疎通を図るというのが非常に困難だし、サッカーが好きということですが、サッカークラブというのも現実問題そこまでなじめるかというので、そこが言語の壁が大きいように聞いておりますけれども、その辺りの日本語学習については何か市は公的な支援はないのでしょうか。

◆市長

もちろん、それも考えております。ここの実務的なところは少し、担当課から答えてもらったほうがいいでしょう。

◆国際交流課

国際交流課の興津と申します。今、ご質問はウクライナの方々、寄り添ったサポートの中で、特に言葉の問題が壁になっているのではないかとこのところですね、すでにお伝えしておりますとおり、5人の避難者の方のうち、4人が子どもさんということになります。学校に通うというような、もう通っている方もいらっしゃいます。教育委員会のほうでも日本語指導があるものですから、そういったところと連携を図りながら取り組んでいるというような状況です。

◆NHK

当座は日本語指導のプログラムの中で、他の日本人の静岡の子たちと一緒に学ぶというよりは、そういった特別なプログラムの中で言語を学ぶということがメインになっているということでしょうか。

◆国際交流課

そうですね。行政の支援としてはそういうことになりますが、民間の方等のサポートを受けているということも聞いています。

◆NHK

それは見通しがあるのですね、そういう。民間の方もサポートしていくという。

◆国際交流課

サポートされているということも聞いています。

◆NHK

分かりました。ありがとうございます。

◆司会

その他、いかがでしょうか。幹事社質問の関連のご質問はいかがでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、その他のご質問をお受けしたいと思います。中日新聞さん、お願いいたします。

◆中日新聞

中日新聞です。海洋文化施設関連なのですけれど、今週月曜日に創生静岡から計画の凍結と再検討を求める提言が提出されましたが、計画の再検討とかはありえますでしょうか。理由も含めて教えてください。

◆市長

大きな方針として、これは3次総に搭載されている事業ですので、進めてまいりたいというふうに考えています。

◆中日新聞

ウクライナ危機とかコロナ禍の長期化を受けて、資材の高騰とか、電気代の値上がりで運営費の高騰とかが懸念されているということなのですけれど、そこらへん含めたビジョンとかありましたら教えてください。

◆市長

ビジョンは、これはJAMSTECさんと東海大学と静岡市、三位一体となって、モンレーの水族館にも赴いて、こういう目指すべき姿の海洋文化施設にしたいな、ということがありますので、世界レベルの学術教育施設にしていくという

ビジョンであります。当面、ご指摘の原材料費の高騰ということもありますので、そのところは今、この事業に意欲を持っているグループの皆さんと、目下目下で検討しているという最中であります。前向きに検討しているというふうに報告を受けています。

◆中日新聞

すいません。もう一点なんですけれど、15年間の事業の期間で70億円の運営費を市が支出するという計画ですが、15年以降の運営について、大規模修繕とかで、より運営の支出がかさむ可能性が高いと思うのですけれど…

◆市長

ちょっと聞こえづらいです。

◆中日新聞

すいません。15年以降の運営について、大規模修繕とかで支出がよりかさむ可能性が高いと思うのですが、この15年以降の将来の運営についてのビジョンがあれば教えてください。

◆市長

そこまでは今、私のところに報告が来ていません。まずは事業者に前向きに検討していただいて、事業化に結び付けると。その2030年までの4次総のところまで検討が進んでおります。

◆司会

その他、いかがでしょうか。よろしいですか。NHKさん、お願いいたします。

◆NHK

NHKです。関連して市長、松坂屋の水族館、行かれたのでしたでしょうか。

◆市長

行ってまいりました。

◆NHK

小さな水槽を並べて、映像で彩って補って、ズームスコープでいろんな標本を拡大して見たりするような研究コーナーですとか、海洋に関する図書コーナー

も壁一面にあって、かなりの部分、規模はともかく、かなりの部分、海洋ミュージアム、海洋文化施設に重なるのではないかなという印象。

◆市長

そう思われますか。私たちは、そうは思っておりません。すごく工夫を凝らした、そんな楽しい水族館になっているなという印象を持ちました。その時に、先方のトップである落合店長といろいろ議論をしました。実は会見で、二つも水族館いらぬのではないかと、というふうに言われているのです、なんて私から報告をしたところ、「いや、役割が違いますよ」という答えが返ってきました。私たちは商業施設の中の一つ、誘客効果をもってこの水族館を立地した、静岡市がJAMSTECと東海大学とやるのは学術教育施設として世界レベルの駿河湾研究の拠点にするということは、全く役割が違う、ということを経験した上で、その上で入門編で、我々の水族館も利用してもらって、さらに、この海のこと、魚のことに関心を持った子どもたちは、ぜひ、その静岡市海洋文化施設に行ってもらったらうれしいですね、ということで、連携をしましょうね、なんて、そんな話をさせてもらいました。

◆NHK

市長、事あるごとにモンレーの視察のことを引き合いに出されて、あのようなワールドクラスの、とおっしゃいますけれども、現にこれまで事業者の質疑の中で、水槽の規模が想定されているものだとずいぶん小さい。松坂屋のモデルにもなった四国水族館など、近年の水族館に比べても水槽規模が全部合わせて1,000トンと、ほとんど東海大海洋博物館と変わらない。こういう中で、できてみたら意外とちっちゃいなと、ありていに言えばしょぼいな、というような印象を与えてしまうような心配はないのでしょうか。

◆市長

そんなことはないと思います。

◆NHK

では、その水族館において大水槽の規模というのは、市長がどうお考えになろうがお客さんからすると、ぶわっと、目の前に大きな視界で見える大水槽というのは、一つ期待されているコンテンツであることは間違いないと思いますけれど、その辺りはどう応えていかれるのでしょうか。

◆市長

議論の共通認識を持ちたいと思うのですけれども、海洋文化施設の最大のポイントは、公益性と事業性の両立です。モンレーのような公益性の高い研究拠点としたいという目標と、我々、下支えするけれども、民間事業として継続をできる、30年先も50年先も継続できる、という事業性も確保しなければいけません。その事業性を確保するときの工夫は、いろいろな方法があろうかと思えます。おっしゃるとおり、大きな水槽にするという方法もあるだろうし、他の方法もあろうかと思えます。AI、VR、ドローン、いろんな技術が今、発展していますのでね。そういう中でエンターテインメント性を高めて事業性も確保するということは、これから事業者グループが決まった中で検討されるべきものだと思っておりますので、ご理解ください。

◆NHK

モンレー、私が英文のウェブサイトを読み取る限りでは…モンレーです、英文ですが、私がウェブサイトなどから読み取る限りは、大水槽 3,000 トンぐらいはあるようですけれども、やっぱりそういった水族館とは比較対象にならないようなものじゃないのですか。

◆市長

いえ、参考にはさせていただきたいというふうに思っています。ただ、そんな大型水槽を作る必要があるのかどうか、コストの面との勘案が大事ですので、その辺りはご理解いただけることだと思います。

◆NHK

ご理解いただけるというのは、市民がそれでいいよという、何か私の知らない声があるのでしょうか。市民の間から、そういった水族館でいいよ、というような何か、声が市として集約されたものがあるのでしょうか。

◆市長

東海大学の関係者の皆さんからも、新しい海洋文化施設に対して期待しているよ、という声はいただいています。その細かな、どんな水槽にするかということとは別に、地区にそういう施設があったらいいね、という期待の声は頂いております。

◆NHK

それは市民からですか。

◆市長  
もちろん。

◆NHK  
どういった声があるのでしょうか。

◆市長  
今、申し上げたとおりであります。

◆NHK  
定量的な何かデータがあるのでしょうか。

◆市長  
ありません。私の定性的な感覚です。

◆NHK  
私、市長のこういった記者会見での応答について、市民の方がどう思われているのかなと思って、ちょっと市役所のほうに来ている市民の声、何十件か見させていただいたのですけれども、一つ読み上げますと、アリーナについてですね。「市長は若者たちがアリーナを欲していると肌感で感じていると言っていたが、肌感レベルで多額の税金を利用しないでほしい」と。もっと言えば、「その会見中に記者に対して、アリーナを欲している人もいることを知っていますよね、と聞き返していたが、それを示すのは市長の役目ではないのか」というご意見などありました。こういった意見、市長、読まれているのでしょうか。

◆市長  
いろんなご意見があるのは承知しています。

◆NHK  
どう思われます？そういったご意見については。

◆市長  
そういう意見に対して、私はこう思うというふうにも思いますし、また私の意見に早くビッグアーティストのコンサートも静岡でやれるようになったらいいな

という声もいただいているのも事実です。

◆NHK

海洋についてもう一つ…

◆市長

本当に最大公約数的に、民主主義ですからね、多様な意見があると。一つだけ取り上げて、そういうふうに、それについてどう思うかということは、この公式の会見で、私がいちいちコメントするということは、ここは控えたいと思います。

◆NHK

私、市長、市民の声、市役所に寄せられた声、100件ぐらいは見ましたが、市長の意見に賛同する意見、一つだけです。「タナベノマスク、イラストかわいかったからいいのではないか」という1件だけあって、あとは全て、タナベノマスクや市長のコロナ感染にあきれ果てる、見苦しい詭弁に市長を辞めてほしい、というような、そういった声ですとか、市長の家の前に空き地でもできたら爆音野外フェス会場を造ればいいじゃないかとか、非常に辛辣な意見が残り全てでした。圧倒的多数が、圧倒的多数と言って差し支えないと思いますが、市長に批判的な声であることをどう捉えていらっしゃるのでしょうか。

◆市長

市民の声、私も毎月毎月、広報課が提出してくれますので全て目を通しています。この市民の声には、行政に対する批判の声が、この項目以外でも圧倒的です。政治用語でサイレント・マジョリティという言葉がありますけれども、市の方向でいいよ、ということについては、こういう市民の声というところに投稿をしないという傾向があります。ですので、その限られた市民の声の中では、そういうことでありましようけれども、しかし、70万の市民の中には期待する声も確実にあるということを私は信じておりますので、事業を進めていくということで、ぜひ、ご理解いただきたいと思います。

◆NHK

今の発言、結構重要な発言だと捉えましたが、サイレント・マジョリティという言葉をおっしゃいましたが、つまり市役所に批判的な意見を寄せる方は、ノイズ・マイノリティだというふうに捉えていらっしゃる。

◆市長

そんなこと一言も言っていません。そんなこと一言も言っていませんよ。そんな失礼なことは言っちゃいけないですよ。

◆NHK

いや、市長。でも市長はサイレント・マジョリティという言葉をおっしゃった…

◆市長

そうです。それは申し上げました。

◆NHK

裏を返せば、声を寄せる人はノイジー・マイノリティだという…

◆市長

それは記者の考えはそうなのですか。

◆NHK

市長の言葉を…

◆市長

私はそうは思いません。

◆NHK

ではサイレント・マジョリティは市長の施政方針に賛同されているということ、何か示す定性的データはありますか。

◆市長

ご意見として承っておきますけれども、この議論はこれに終わりにしましょう。

◆NHK

市長、よく答えに困ると司会の大塚さんのほうに目配せするのですけれども、大塚さんに質問を打ち切る権限はありませんので、それは記者クラブと広報課の間で、もう何度も確認をしていることですので、市長にも伝わっているはず、ですから市長、質問、これ、打ち切ることはできませんので、お答えいただけませんか。定性的なデータはあるのでしょうか。



◆市長

じゃあもう一度質問を、分かりやすくおっしゃってください。

◆NHK

サイレント・マジョリティの市民の方、つまり大多数の市民の方が、市長の今の施政方針に賛同しているという定性的なデータはあるのでしょうか。

◆市長

定性的なデータっていうのは、どういう意味でしょうか。

◆NHK

何かアンケート結果ですとか。

◆市長

私は多くの市民の方々と接しておりますので、そういう中で私のところに、いろいろ大変だろうけれども、コロナ禍もあるけれども、でも、何とか5大構想を進めてほしいよ、というふうに背中を押してくれるような声を聞いています。

◆NHK

つまり肌感ですね。

◆市長

それが定性的な私のデータということになります。

◆NHK

分かりました。次の質問をします。海洋文化施設について入札公告が延期されている状態ですけれども、これ、いつぐらいまで延期して、入札実施、あるいは契約、いつになる見通しなののでしょうか。

◆市長

先ほど申し上げたとおり、今、目下目下で検討しています。できるだけ早いうちに次のフェーズに進みたいと思っています。

◆NHK

当初想定されていた11月議会での契約ができないとなると、2月議会になるのか、4月の臨時会とか6月議会になるのか分かりませんが、確実に海洋文化

施設やるのかどうかは来年の市長選の争点になりますけれども、これは、市長は争点として推進するのだということで掲げたいということでしょうか。

◆市長

争点はたくさんあろうかと思えますけれども、もちろん、これは3次総の事業で2年前、コロナ禍で余儀なくされて、いったん立ち止まったわけですから、計画、今年度で終わりですのでね。そこにできうる最善の努力をしていきたいというふうに思っています。

◆NHK

もう少し市長選の関心事として、今月退任なさった難波副知事について、来年の市長選に出てほしいよと期待する声と、3年前の経緯等々を踏まえると難しいのではないかという声と両方聞かれますけれども、市長は難波現県理事に何か来年に向けて期待されることとか、何か思われていること、ありますでしょうか。

◆市長

難波副知事には本当に、清水港の竣工について大変なお力添えをいただいておりますので、大変敬意を表しています。これからも県市連携で、清水港をはじめ、その他の難波さんの所管事項について協働してやっていきたいというふうに思っています。

◆NHK

事実関係として伺いたいのですが、3年前についてはいろいろな要因があったと思いますが、難波さんが出馬断念会見まで開いた経緯として、田辺市長が代議士等に働きかけたことも一つの要因として語られていますけれども、改めて市長が、あの時、何をしたのか、お答えいただいてもいいですか。

◆市長

選挙のことは、公式の今日の記者会見で言うべきではないと思いますので、その辺は、ぜひ自重していただきたいと思います。

◆NHK

質問は自由ですので、来年に向けて難波さんの動向について、何か働き掛けたいというお気持ち、今もお待ちしておりますか。

◆市長  
ありません。

◆NHK  
分かりました。ありがとうございます。

◆司会  
その他、いかがでしょうか。先にじゃあ後ろの。

◆静岡新聞  
静岡新聞の清水支局ですが、脱炭素先行地域のお話なのですけれども、すいません。ちょっとお話として戻るのですけれども、この目的なのですけれども、スポット的に地域に脱炭素エリアを作ることが主な目的なのか、それとも企業立地なんかが進む、今のお話ですと、いろいろ投資が地方公共団体の投資なんかが進むエリアに、住み分けがされているエリアにそういうものを作られて、企業誘致とかの投資の呼び水にしたいという意図があるのか、市長がお考えになっていらっしゃる目的といいますか、そこを改めてお聞きしたいというのが1点と。

◆市長  
それにまず答えさせてください。とてもいい質問ですので、的確に答えたいと思います。まず私たち、SDGs未来都市ですので、このSDGsの国際目標に向けて、脱炭素達成をするという一翼を自治体として担っていきたいというのが最大の目的であります。一方SDGsというのは、ビジネスチャンスでもあります。新しい時代に対応したビジネスチャンスを生み出すと。そこに先行的な投資を企業の皆さんはするべきだ、という立て付けになっております。ですので、この公共の目標と事業者のビジネスチャンスを両立する、そのコーディネートをするのが自治体の役割だというふうに理解をしています。

◆静岡新聞  
ありがとうございます。すいません。日本平動物園のゾウのシャンティが亡くなって、その後、私のほうでも書かせていただいたのですけれども、当時の経緯を知る方がいらっしゃったと。静岡市さんとして、何か当時の関係者さんにお礼の手紙を送られるというようなお話も、動物園のほうでお聞きしたのですけれども、こちらは何かやられた、そういった具体的な行動をなさった時には

リリースとかなさったりするのでしょうか。

◆市長

どこにお手紙を送るということですか。

◆静岡新聞

インドから日本平動物園に来た時に、いろいろ経緯を知っていらっしゃる方がいまして、具体的な名前なんか分かっていたりとか、これまでは、動物園に聞くとところによるとマイソールから来た、という話だけあったというところですが、何かお礼のお手紙を送られるというようなお話をお聞きした…

◆市長

私に報告が来ていませんので、観光交流文化局長から答えます。

◆観光交流文化局

観光交流文化局長の望月です。静岡新聞さんの記事にも出ていたとおり、関係者からお礼のお手紙はどうだろうかというような、そういうご提案を受けております。我々もインドのほうに何らかの、やはり、これまでシャンティが静岡に入った経緯等を調べまして、お礼をする準備をしております。また、その際には、リリース等、流させていただく予定であります。

◆静岡新聞

ありがとうございました。リリースせよということではないのですけれども、すいません、ありがとうございました。

◆司会

それでは定刻の45分間を過ぎようとしておりますので、ここで終了とさせていただきます。中日さん、1問だけで大丈夫ですか。

◆市長

どうぞ。

◆中日新聞

すいません。先ほど海洋文化施設についてなんですけれど、世界レベルの研究拠点としていきたいと話されていましたが、今の計画では、その場で研究するというわけではなくて、何か研究発表の場を想定しているというふうに

聞いていたのですけれど、個人的には研究発表の場だけでは研究拠点とはいえないのではないかな、とは思うのですけれど、そこら辺、どう考えているのか…

◆市長

これからの議論ですね。やっぱり当事者である研究者の皆さんが、この拠点施設をどういうふうにご利用していきたいのかということも、事業者が決まった後にヒアリングしていきたいなというふうに思っています。

◆中日新聞

分かりました。ありがとうございます。

◆司会

それでは、以上で本日の定例記者会見を終了させていただきます。次回は6月7日、11時からの予定となっております。本日はありがとうございました。